

# 四国の地域力を考える

## ～四国西南地域のブランド化～

高知大学 国際・地域連携センター  
教授(生涯学習部門長)

### 坂本 世津夫



平成14年4月から3年間、愛媛大学で「地域情報学」(伊予銀行寄附部門)を担当していた。「地域情報学」とは、「地域学」と「情報学」を一緒にしたような、今までにはない新しい学問で、情報化社会における地域のあり方を研究する学問である。例えば、観光振興や地域コミュニティづくりに情報通信技術を活用して、如何にすれば地域力を高め、地域を活性化できるのかについて研究してきた。そして、愛媛大学にいた最後の1年間は、愛媛県(松山)への外国人観光客受け入れ環境整備についても取り組んだ。その関係もあり、今回ご紹介する四国西南地域の「西南」というネーミングには非常に思い入れがある。愛媛県の南予地域と高知県の幡多地域をまたがるエリア、四国西南が私は大好きである。この「西南」というネーミングが付けられるエリアは、多分、日本の中でも四国しかないのではないかと考えている。この西南地域(半島地域)をブランド化しようと、この数年間取り組みを続けている。2年前に高知大学に移ったが、現在は「生涯学習」を担当しながら、本来の専門である地域づくり、地域産業おこし、地域人材育成について取り組んでいる。今回、こうした経験を踏まえながら、高知県の三原村を事例に、これからどうやって四国西南地域をブランド化していくか、西南地域の地域力を高めていくかについてお話しさせていただく。

### 1. 「濁酒特区」で村をブランド化する (高知県三原村)

高知県の西南部で、いま密かに濁酒で「村」をブランド化しようとしている村がある。高知県幡多郡三原村である。「密かに」というのは、まだまだ情報発信ができていないという程度の意味であるが、密造酒の代名詞である「濁酒」は、確かに「密かに」というのがキーワードであるかもしれない。密かに、こつこつとブームを作りあげていくということは、「都会」のブランド化とは違い、「田舎」のブランド化においては重要なことである。スローフードではないが、じっくりと時間をかけて熟成させ、ブランド化していくのである。しかし、そうは言っても、いつまでも「密かに」していてもいけない。そろそろ村をあげてのブランド化の取り組み、情報発信が必要である。その為の環境整備について、これから色々な仕組みを作りたいと考えている。

#### (1) 「桃源郷」の三原村

高知県は当初、市町村の合併を推進することよりも、むしろ市町村の自立を目指した地域づくりを推進してきた。市町村の自立に対する考えは今も変わっていないが、そのこともあってか、高知県内の市町村における自立に向けた取り組みは思ったよりも盛んである。しかしながら問題点は、高知は組織化、仕組みづくりが